# 世田谷村日記

石山修武

十月二四日

昨夜の地下ミーティングは面白かった。柴原から人間の表情の筋肉の仕組みの小レクチャーを受け、マスクの事例を見せてもらった。女性は皆興味深そうに聞いていた。そうだろうな、女性の深い関心事に違いないからな。その後小さなブレインストーミング。意味のないおしゃべりの準備体操を経て、スケッチ。安藤のオリジナルスケッチをベースにそれのある種の構築化を行った。良い成果を得た。一歩前へ進む事ができた。厚生館の建築は楽しみを尽くしたい。色んな雑事で気が滅入る時も少なくないが飛んでもないアイデアが生まれるとそれも消える。八時過ぎ地下へ。ワールドフォトプレスの連載が決まりその年間の枠組みを中里さんと話し合わなければならぬ。

十二時大学へ。中国の件打ち合わせ。

十四時過ぎ芝パークホテル。ヘルシンキ芸術工科大学長ソタマ氏栄久庵憲司氏フィンランドセンター所長カティア・ヴァラスキヴィ女史等と二〇〇三年の展覧会の打合わせ。新宿の文化学園東京ガス、オゾンと廻り、十八時半新宿パークホテル三四階で会食。ソタマ学長栄久庵のホスピタリティの大きさにはいつもながら感服する。二十一時半世田谷へ戻る。男性スタッフにＨＯＢＯＲＳコラムをウェブサイト上で展開する事を依頼する。男共よしっかりせい。石山研のウェブサイトにバウハウス大学中原大学早稲田大学の４、５年生の共通課題への作品が掲載され始めている。それらを比較してみると早稲田の学生の考える力は残念ながら幼稚だな。今月末にはサンパウロ大学の学生の作品も来るから増々その実体は歴然としてくるであろう。小器用だが考え方そのものに深さが無いんだナァ。磯崎が随分昔に日本の建築教育をうれうというエッセイを書いていたが、それは今や増々歴然としてきている。他人事みたいに言う立場ではないが、どうしょうもネェなこれだけは。私のところの地下だけはそういう事のないようにしたいのだけれど。くらい鳥放送は闇乃鳥放送と変名したようだ。闇乃鳥放送とＨＯＢＯＲＳの組み合わせか。我ながら地下の将来に不安を感じるが、不安の中から希望も生まれてくるだろう。

今日は午後中歩き廻りさすがに疲れた。流石に体力の減退を痛感するが、低出力のママに動く方法を身につけるしかないだろう。

十月二五日

何日か振りに陽光を見る。世田谷村の生活は天気と共に在る。地下室への南側からのアプローチを開ければ、加えて大地と共にも在るようになるのだが。八時半地下へ。東からの朝の光が振りそそいでくる。建築の視覚的側面からの価値はほとんど光に左右されるのが良くわかる。厚生館のため「たつまき」のモデルに光がさして、それが白い紙に不思議な影を写している。光と影。どちらが実体なのか混濁してくるが、影の方が美しい。影には触れられぬからな。今日も一日雑用が多いが何とか切り抜けよう。建築設計は雑事の群の戦場だよこれは。机上の想案だけではいかんともしがたいモノが多過ぎる。これに負けてしまうと実物は作れないと言う現実がある。地下の人数は今のところ私を入れて九名だが、もう一人くらいいても良いな。

ソタマが仙台市で何かしているようだが、チョッとその仕事の

枠組みは参考になるようだ。十三時中原編集事務所世田谷村取材。下村純一写真。中原氏とは久し振りで、短いあいさつを交わす。十四時半大学。修論チェック。三年製図。十七時半修了。二〇時まで明日の講演会のスライド準備。二一時世田谷へ戻る。厚生館のプロジェクト模型を見る。二二時半西調布へ。聖徳寺観音堂打ち合わせ。二四時過修了。

十月二六日

〇時半打ち合わせをおえて世田谷に戻る。何でこんなに仕事するんだろうと我ながらあきれる。疲れ過ぎて眠る気にもならない。明日を乗り切る事だけを考えるような状態だ。ロクな人生じゃネェーなこれでは。

八時四〇分地下へ。聖徳寺観音堂の建設を急がなくてはならない。指示をいくつか。ゆっくり生活しなければならぬ時代の、そのゆっくりさに合わせる事ができないんだな。くらい鳥放送の第一次放送の草稿をチェック。我スタッフの総合的レベルはまだまだ遠いな。はるかに。十四時大学資料集収。十六時前京橋ＩＮＡＸギャラリーＪＩＡ講演会。編集者の植田実が逃げて渡辺豊和が大阪からはるばる私の講演のクリティークを行うために来た。満員の観客の中に石井和紘が居て、講演の後鼎談となる。石井の批評はあいも変わらず速力があって、辛らつだ。十八時半修了。渋谷へ。二十二時過世田谷村へ戻る。女性が三名残っていて仕事をしていた。若い女性が土曜日の楽しみを捨ててコレじゃイカンとは思うのだが仕方ネェか。